

## 児童期における友人関係概念と社会的視点取得との関連

小池理穂

### I 問題

児童期の友人関係については、その影響力の大きさが指摘されながら、この分野の研究が少ないという指摘がある。また教師や親との関係ではなく子供同士の人間関係がどのような機能を果たすか、その機能が発達と共にどのように変化していくか、を明らかにすることが重要であるとも言われている。現在、いじめや不登校問題など、日本の学校社会では課題が多い中、子供たちに大きな影響を持つ友人関係を取り上げ、あらためてその性質や機能について考察を加えることは重要である。

本研究では1対1の友人関係を形成する出発点とも考えられる児童期後期の友人関係に注目し、発達変数にもなう友人関係の変容に焦点を当てる。文献より、友人関係の発達の变化について、「友達とは自分と同じ行動をする・一緒に遊んでくれる相手であるという自己中心的で物理的な段階から、援助や協力し合うのが友達で、仲間での決まりが自分の行動の基準となり、そこから固定した友人との親密な関係が形成される段階に移る。そして相手の人格を尊重し、互いに共感できることが重要と考えられる段階へと移行する」と示されている。

一方、この時期の「自己」については、その理論的考察は続けられてきているものの、方法論の限界を理由に実証的データが少なかつたという指摘がある。そして自己の発達に文化の問題が深く関わっているという主張もあり、この点に関しても考察を加える。先行研究では、自己をとらえる時、まず物理的事実や外見的特徴をとらえることから始まり、その後対人関係の中で自分が示す傾向や、気質や個性といった内面的な特徴をとらえることが大きなウェイトを占めるようになることが示されている。つまり、感情や考えなどの内面的な自己を含めてとらえることができ、他者の中にもそうした内面の存在に気付くことによって、自己を他者の視点に立ってみる見方を獲得すると考えられ、それを検証するデータもいくつか示されている。

さて、児童期の友人関係研究をまとめている Selman, R. L. は、子どもは「瞬時的で物理的な要素が強く作用する友人関係のとらえ方から、組織的で継続的なとらえ方に変わり、心理的に相互依存し、個人の感情や思考を理解し合うものとして友人関係を理解するようになる」

と述べている。そしてこうした友人関係概念の段階的な発達変化の土台となるような社会的認知プロセスがあることを仮定して、それが社会的視点取得 (social perspective-taking) であると主張した。これは、「子どもが他者の視点をとることができ、本人自身にそれに関連させることができるようになるプロセス」であり、「視点」とは人が思考したり感情を抱いたりする際の基となる外的認知のための立脚点をさす。幼い子供の持つ自己中心的な視点から、成長に従い、他者の視点に立つことができはじめ、相互的な見通しを付けることができる。そして、自分や自分と他者との関係を第3者の視点から見ることができる。Selman, R. L. のモデルでは、各ステージの友人関係概念が形成されるには、そのステージと構造的に平行した社会的視点取得のレベルに達することが前提となるという、層構造仮説を実験により検証している。

社会的視点取得の発達が友人関係概念の発達に先行するというこうした理論に対し、日本では平良 (1985) が、「子どもは自分と対等な友人との相互交渉のなかで、意見や要求の対立を経験することによって、自分と異なる他者の視点に気付き、それにもなつて自己中心的論理から脱却していく」という考え方にたち、社会的視点取得の発達も、具体的な事象や対人関係を通じて発達していくものだ、としている。つまり、社会的視点取得と友人関係概念は、相互に関連しながら発達していくのではないかと考察している。

### II 目的

友人関係の影響力が高まると示唆される児童期の高学年を対象に、Selman の理論を参考に社会的視点取得の発達と、友人関係概念の関連について調べる。今回は、1対1の親密な友人関係の機能にも考察を加えるので、自他の視点の分化が達成されると示唆された4年から、自己についての認知が進む過程にあり、探索しはじめる時期にあたる6年への発達の様相に焦点を絞る。また社会的視点取得の測度は、今回 Selman と同じ課題を用い、平良が統制していた IQ による統制を加えない。そうすることで、Selman と平良の実験結果の違いが、両者の用いた課題の違いによるものなのか、あるいは他の要因があるのか明確にできる。また IQ の統制を加えな

いことで、あるがままの児童の実態に近付くことができると考え、Selmanの結果よりも友人関係概念の発達が進んだ、という平良の結果がIQ統制か、文化差の要因が関与するのか、検討の必要を指摘された点を明らかにする。

このような問題意識を持って、以下のような点を検討することを目的とする。①1対1の友人関係の重要性が高まる児童期後期にあたる小学4年生と6年生を対象に、その社会的視点取得の発達と友人関係概念の発達との関連について明らかにする。②児童期後期の1対1の友人関係の機能について、4年生と6年生を比較し、自己の発達という観点から検討する。③社会的視点取得・友人関係概念の発達に関して、IQの意味及び文化的要因がどのように関与しているか検討する。

### Ⅲ 方法

公立小学校4年生と6年生の計68名を対象に、個別実施、この際IQ統制は行なわなかった。Selman, R. L.の2つのストーリーを紙芝居で提示し、それぞれの話の後に設定されている質問をし、思っていることを自発的に話してもらった。評定は、社会的視点取得・友人関係概念の各反応に対し、各発達段階が定義されており、それを分類の基準とした。

### Ⅳ 結果と考察

①社会的視点取得と友人関係概念の関連については、社会的視点取得の発達と、友人関係概念の発達が、構造的に平行する段階を持つことが認められ、本研究においてもSelmanの仮説検証が、平良同様に再確認された。

両者の関連については、Selmanは社会的視点取得が友人関係概念に先行するという結果を得ているが、本研究の結果より、必ずしも先行するとは言えず、逆に両者で同じレベルの発達を示す者が最も多かったり、友人関係概念の発達が社会的視点取得に先行しているものもいた。この結果より、課題の相違ではなく、社会的視点取得の発達が日本とアメリカではかなり異なるという考え方が支持される。層構造仮説は検証されなかったが、両者の相関関係を見てみると、かなり高い相関係数を得ており、両者の関連性の高いことを示している。よって両者はどちらが先行するという発達ではなく、相互に関連

しあいながら、発達していくと考えられる。

②自己の発達への友人関係の機能について、学年差による検討については、分析の結果、「親密」が他の「形成」「信頼」に比べ、有意に高いことが明らかとなり、「親密」の重要な時期であることが示唆された。また、4年生に比べると6年生は社会的視点取得、友人関係概念ともに明らかに発達した段階にあり、学年間での相違の大きな点は、自他の視点の相互的な関連づけができることと心理的相互性であることが明らかになった。つまり、高学年においては友人関係における「親密」という側面がとても重要で、自己を内省でき、友人との間でも内面的な心理交換がそうした自己の発達にも大きな関連を持って、重要な機能を果たしていることが示唆された。このように見てみると、この時期の友人関係は、自己をとらえる時に、より心理的、内面的なとらえ方の広がりをもたせるような機能を果たしているという仮説が支持されたと考えられる。今後さらに、友人関係のどのような相互作用が、どのように機能しているのか明らかにしていく必要がある。

③社会的視点取得・友人関係概念の発達に関する、IQの意味及び文化的要因については、両者の発達に関して、IQと文化的要因が関わっていることが明らかになった。IQに関しては、統制を加えない本実験は、統制を加えた平良の実験よりも低い得点を示している。また、文化的要因については、アメリカにおいては社会的視点取得の発達が、日本では友人関係概念の発達が他国よりも先行している、ということよりも、双方の文化、そこにある対人関係における価値観によって規定されていることによる違いが明らかになったとも考えられる。つまり、アメリカでは個の「独自性、ユニークさ」が求められ、育てられ、常に「自分と他者とはどこが違う」という意識を抱えて生活している。一方、日本では対人関係に関わる価値で「和」を尊び、協調性が重視され、「自分は他者にどう見られているか、(文化的・状況的に)正しく振舞っているように、見られているか」が先に意識されやすい文化だと考えられる。したがって、今回の両者の関連もその文化の価値によって求められるものの相違、という文化的差異の一表象とも考えられる。